

# 第二十二章 オスウーマントルコのフリゲート

ブラックシー艦隊から巡航ミサイルがウクライナーのインフラ設備に向かって発射される。

「節操がない！ イジメでしかないわ」

宇宙戦艦の艦橋の大型浮遊透過スクリーンを見つめるイリの堪忍袋の緒が切れる。

「主砲発射準備！」

「待ってください！」

加藤がイリの前に立つ。

「宇宙戦艦の存在が知れ渡ればすべての視線がこちらに集中します」

「目の前で人が死んでいるのよ」

「非常に残念です。でも原因を造った人類が解決すべき問題です」

「何を言ってるの！ 私たちも人類よ」

「たまらず榊が割り込む。

「もう人類ではない。生命体そのものの星の一構成員に過ぎない。足下のアリすら踏んで殺してはいけないし、きれいだと花を摘むことも許されない」

「と言って榊は爆笑する。」

「俺の考えではない。仏の教えだ。俺は坊主ではないが」  
榊が真面目顔に戻す。

「あらゆる生命体は競争進化しながらも共存して星を守らなければならない。そういう宿命を負っている。もし進化がすべてだとして強大頭脳を持つまでに進化した人類がその頂点に君臨したとすれば、競争に敗れた他の生命体は消滅せざるを得ない。つまり生き残るのは人類だけになってしまう。でもそうじゃない」

イリには体格も風貌も違う榊をノロと勘違いする。まるでノロが榊の口を使って説教しているように思えたからだ。イリは考え込む。加藤が宇宙戦艦の中央コンピュータに静かに命令する。

「主砲発射準備取り消し」

\*

「人間だけが生き延びるなんてあり得るのかしら」

イリが自問する。と言うより加藤と榊はそう解釈した。

「私の身体は何十兆という細胞で支えられているわ。でもその一つ一つは単純な生命体に過ぎない。脳を支える血液にしたって……」

ノロが第二の地球の探索にこだわった理由を今はじめて真摯に受け止める。

「一から作り直す。でもノロには『自分が創造主だ』という雰囲気はなかったなあ」

網を振り回して虫を追いかけると天真爛漫なノロを思い出す。しかし、単なる天真爛漫と片付けられない気迫もあった。

「真剣勝負。決していい加減じゃなかったわ」

急にイリが泣き出す。そして床に座り込んで膝を立てる。全身の水分をすべて涙にする。加藤も榊も長老もただ沈黙を守る。その雰囲気は中央コンピュータも察したのか直接加藤と榊にピンポイント警告を発する。

「オスウーマントルコへ向うトウモロコシを満載したウクライナ共和国の貨物船にソシア海軍の駆逐艦が接近中！」

艦橋の浮遊立体透過ビッグスクリーンに白波を立てる駆逐艦が映し出される。まっしぐらに貨物船に向かっていく。加藤はイリを見つめながら低い声を出す。

「主砲発射準備」

中央コンピュータから意外な言葉が返ってくる。

「先ほど取り消されました。再準備しますか」

イリが立ち上がる。

「再準備、中止！」

\*

ソシア駆逐艦が若干速度を落とす。攻撃態勢に入るため姿勢を安定させるためだ。軍艦なら

かまわず接近して攻撃するのだが、相手は足のノロい貨物船だけに確実性を優先する。まもなく五インチ砲の射程距離内に到達する。

「対艦ミサイルで攻撃しますか。それとも砲撃しますか」

下士官が館長に命令を催促する。

「相手は貨物船。五インチ砲で十分だ。距離を詰める」

そのとき緊急報告が入る。

「偵察衛星からイスタンブールから高速の船舶が貨物船に向かっていているという情報が入りました」

艦長は反応しない。しばらくして下士官が告げる。

「高速の船舶はオスウーマントルコ軍のフリゲート艦です」

オスウーマントルコ軍の小型戦闘艦の最高速度は五十ノット（約時速八十キロ）以上でソシア軍の駆逐艦の約一・五倍以上。搭載する武器は軽装だが奇襲攻撃が得意で速射砲で攻撃しては反転して離脱するという波状攻撃は脅威だ。対艦ミサイルはこのフリゲートには通じない。とても侮れない存在だ。

「気付かれたか」

艦長の言葉の意味を誰も理解できない。極秘作戦が行われていようとは側近の下士官でさえ知らない。貨物船一隻に巡洋艦を向かわせるわけにはいかないし、もちろん複数の駆逐艦を向

かわせるわけにも行かない。ここは何とかしなければと艦長が焦る。

「これ以上接近するな」

オスウーマントルコのフリゲートからの通信がはいる。

「どうしますか」

「マイクをよこせ！ 全速前進継続！」

駆逐艦が後ろ向きの慣性を受ける。すかさずフリゲートが貨物船と駆逐艦の間に割り込む態勢に入ると速射砲の照準を駆逐艦に合わせる。慌てて艦長が下士官からマイクを取り上げる。

「オスウーマントルコのフリゲートに告ぐ。あの貨物船にはウクライナー共和国の諜報員が紛れ込んでいる。クリム半島からオデッセイに脱出してあの船に潜んでいるのだ。邪魔するな」

艦長はフリゲートが速度を緩めた瞬間を見逃さなかった。

「ミサイル発射！」

駆逐艦からミサイルが発射される。と同時に貨物船に向けられていた5インチ砲の照準をフリゲートに変更させる。さすがに極秘任務に抜擢された艦長のことはある。

ミサイルはフリゲート船尾すれすれのところで爆発する。失速したフリゲートに5インチ砲弾が命中する。あえなくフリゲートが沈没する。

駆逐艦は貨物船に近づくと停船させる。しばらくするとロシア軍の武装ヘリコプターけたたましい轟音を上げて貨物船に向かう。いつの間にかこの海域にロシア軍の巡洋艦が到着する。

恐らくこの武装ヘリは巡洋艦から飛び立ったのだろう。

「あの貨物船に何かがある」

榊が腕を組んでうなる。一方加藤は情報収集しようと中央コンピュータにアクセスする。

\*

無線という通信は盗聴されやすい。たとえば北朝鮮軍は無線を使用しない。無線機やアンテナや関連設備を製造するだけの能力がない、あるいは貧乏だから輸入できないと言われているが、盗聴が得意な彼らは無線の欠点を知り尽くしている。便利だが危うい面を持つのが無線通信だ。

いともたやすく加藤が宇宙戦艦の中央コンピュータからソシア軍の情報を手に入れた。しばらくすればヨーロッパ諸国も同じ情報を手に入れるだろう。加藤がイリや榊に説明する。

「ソシアから脱出したウクライナの諜報員が乗船しているという理由で貨物船を停船させて調べようとする口実。実際は大統領プレンコンを暗殺しようとしたソシア人が貨物船で亡命しようとしているようだ」

「確かなのか」

二人ともイリを見つめるだけでうなだれる。あの貨物船の積み荷を待っている貧しい人々がいるのを忘れていたからだ。

榊が念を押す。加藤が頷くとイリに視線を向ける。